COSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

公益社団法人 中越防災安全推進機構　機関紙
2014　春
VOL.　7

震災から 10 年
地域はこれからの未来をどう描くのか

―地域復興交流会議―

contents

特集① P2-3
「地域復興交流会議」
復興の歩みとこれからを考える

特集② P4-5
「“防災教育立県”を目指して」
新潟県防災教育プログラム完成へ

【シリーズ 人と人】P6「郷土料理を通じて生まれた地域とのつながり」雨木　香奈子・駒井　洽子
【COSSS リレーエッセイ】P7「写真の力」震災アーカイブス・メモリアルセンター　松本　勝男
【コラム 視点防災】P8「パッククッキングのすすめ」【その他】P8 インフォメーション、施設のご案内、会員募集

復興の歩みとこれからを考える～

地域復興交流会議の歩み

中越地震から十年を迎える本年、三月三十日に第六回目の地域復興交流会議が開催された。

「地域復興交流会議」とは「中越地震から復興に向けた活動を行っている団体、個人の情報交換やネットワークづくり」を目的に二〇〇七年二月に第一回を開催。これまでに旧川口町や魚沼市などで開催し、毎回約五十団体以上が参加している。今回の地域復興交流会議では、「震災から十年を迎え、これまでの十年の復旧・復興の取り組みを振り返り、これからの地域づくりを考える」ことを目的に、五つのテーマに分かれて座談会と交流会を実施した。

ここでは、当日の座談会の様子をダイジェストで振り返る。

Aグループ「震災で小規模化した集落運営は、今どうしてる?」

中越地震以降、被災集落の人口・世帯数の減少が進み、集落運営の方法に工夫が求められている。この分科会では、話題提供者の山古志池谷の青木さんをはじめ、参加者の方に集落の状況やいかに少ない人員やお金で集落に必要な活動を行う工夫をしてきたかをお話いただいた。集落運営の核をなす役員の仕事や報酬をどうスリム化するか、集落が持っている集落センター等の施設の省エネ化を図る、はたまた神社の建物はなくし、集落センター内に神棚をつくって祀るなど様々な工夫が行われていることがわかった。また、スリム化するだけではなく、集落のつながりを強め、楽しく暮らす、助け合いながら暮らすための活動を新たに生み出すなど、この集落で住み続けることへの積極的な意義を見出していくというようなことも考えながら、実践されていた。

（復興デザインセンター　阿部　巧）

Bグループ「震災後生まれた地域ビジネスの成果と課題は?」

雇用創出、移住者の受入、地域の課題解決など、農村ビジネスは色々な面からその必要性が叫ばれている。この分科会ではアルパカ村の青木さん、農家レストラン多菜田の五十嵐さん、わかとち未来会議の細金さん、農村レストランすがばたけの原さんの四名の実践者から、事業を始めたきっかけや経緯、今現在の課題や今後の展望などについてお話をいただき、参加者を交えての意見交換を行った。

分科会のなかでは、農村ビジネスは市場経済という物差しだけではなく、集落の人たちが生き生きと暮らしていくための仕組みとして、その役割があるとの認識が得られた。

即決が求められるビジネスにおいては、合議制にもとづく集落組織は不向きで、自治組織とは別の法人・団体が必要である。集落自治組織との距離感・関係性をどうつくるかは一つの課題と言える。そして、農村ビジネスを持続・発展させていくための課題として、後継者の確保・育成などが挙げられた。

（復興デザインセンター　金子　知也）

Cグループ「都市との交流活動の成果と課題は?」

中越地震以降、活発になった都市と農村の交流。しかし、継続性や情報発信など様々な課題が出てきている。この分科会では、都市の人だけでなくさまざまな人との交流が地域の活性化になるということを、あらためて参加者で確認しあった後、今後どのようにそれを継続できるのか課題を出し合った。例えば、集落単独では難しい情報発信や窓口機能を担うための広域連携の必要性や、これまで活動にあまり関わってこなかった地域内の若手との情報共有の場が必要ではないかといった意見が出た。また、これまでの交流活動で大きな役割を果たした地域復興支援員のような人材の重要性や、復興基金事業がなくなった後の財源をどのように確保できるかなど知恵を交換し合った。

（京都大学防災研究所　宮本　匠）

特集① 地域復興交流会議 ～

D グループ 「これからの移住・定住の取り組みを考える！」

「地域の担い手の不足」―これは日本全国の中山間地の課題である。中越地震で被災した集落では、特にこの課題は深刻であり、震災をきっかけに人口が四割も減った地域もある。

この分科会では、これらの課題を解決するために、「新しい担い手」として移住者の受け入れについて議論した。初めに、栃尾に移住してきた刈屋さん、十日町市地域おこし実行委員会の山本さん、小国インターンシップ受け入れ連絡会の青柳さんの三名に移住の取り組みについて報告をいただいた後に、課題や今後の展望について意見交換を行った。

移住の課題である「仕事」については、複数の仕事を掛け持つ方法や、各種支援制度を有効活用するなどの意見が出された。また、移住者を受け入れる体制づくりについては、地域で毎月会議を行う事や、少ない日数の交流を行うなど「小さな積み重ね」による体制、雰囲気づくりが重要であるといった意見が出された。最後には、集落や地域の〝ビジョン〟が移住者を惹きつける大きな要因となっているため、「集落の高い目標を語り続ける事」が移住者を呼ぶ第一歩である事を共有し、会を締めくくった。

（復興デザインセンター　日野　正基）

E グループ 「地域経営・地域総合型ＮＰＯのこれからを考える！」

長岡市では、震災からの復興の集落活動を補完しつつ、合併前の旧市町村単位の自治を補完する地域経営・地域総合型ＮＰＯが設立されている。この分科会では、四つのＮＰＯ法人から活動報告があった。小国地域のＮＰＯ法人ＭＴＮサポートの小島さんからは、高齢者支援に力点を置き活動をしている点、次年度からは、小国出身者に賛助会員を募り、経営を安定していく旨の報告があった、川口地域のＮＰＯ法人くらしサポート越後川口の水落さんからは、地域の認知度を上げる活動に力点を置き活動している点、次年度より集落活動の事務局支援を行う旨の報告があった。山古志地域のＮＰＯ法人中越防災フロンティアの田中さんからは、クローバーバスの有償化に対する住民の理解促進の活動や山古志らしい市民協働センターを目指す取り組みの報告があり、栃尾地域のＮＰＯ法人フォーラム栃尾熱都の佐藤さんからは震災前からの地域づくり支援の取り組みや行政の支援は受けずにボランタリーな活動で継続性を担保している旨の報告があった。

意見交換では、十年後の地域の姿を見据えたうえでの組織の継続性が議論され、またこの四つのＮＰＯが今後連携するなかで活動を進めていくことが議論された。

（復興デザインセンター　稲垣　文彦）

最後に

震災からもうすぐ十年。地域は試行錯誤しながらも、着実に歩を進めている。しかし、中山間地の過疎化、高齢化などから来るさまざまな諸課題は、いまだ明快な解決策を見いだせてはいない。引き続き、中越ではこの課題解決に取り組み、日本の中山間地のモデルとなるよう努めたい。

（復興デザインセンター　日野　正基）

特集②「“防災教育立県”を目指して」

山古志での震災体験を語る齋藤氏（長岡市川崎小学校にて）

新潟県防災教育プログラム完成へ

平成二十四年よりスタートした「新潟県防災教育プログラム制作事業」がこの二月末日で終了し、その集大成である「新潟県防災教育プログラム」が県下の小中学校および高等学校、特別支援学校に一斉に配布された。

プログラムは、地震災害や津波災害を始め、新潟県で発生しうる洪水災害、土砂災害、雪災害編の教材（学習指導案、映像・写真教材、児童生徒用ワークシート）と、プログラム全体構成など事業全般について説明した「概要編」、授業前に必ず先生方に一読していただきたい「教職員用ガイド」がセットになっている（原子力災害編については現在制作中につき、別途配布予定）。

新潟県防災教育プログラム（完成版）

プログラム完成のご報告とお披露目を兼ねて、一斉配布と同日の二月二十八日に、長岡市立川崎小学校で特別授業を実施した。ゲスト講師として、地震災害編制作ワーキングの座長である澤田雅浩准教授（長岡造形大学）と、中越大震災当時、山古志村職員であった齋藤隆氏（現・中越防災安全推進機構職員）を迎え、小学四年生に向けて授業を行った。

まず、澤田准教授からは、中越大震災の際に民間から集められた義援金によって、この事業がスタートしたこと、また自らの命を自らで守っていくことの重要性を踏まえ、防災教育を学ぶ意義などをわかりやすく説明していただいた。引き続き斉藤氏による講話では、自身が住む山古志での震災当時の体験について、写真パネルを用いながら語っていただき、家族や友人との絆、命の大切さについて話していただいた。

児童代表からは、「澤田先生の話を聞いて、教材を作るのはとても大変だったこと、いろいろな人が募金したお金を使ってこの本を作っていることがわかった。今日の学習を活かして、これからも自分の命を大切にしていきたい」「斉藤さんが言うように、災害で命を落さないように、家族ともしもの時はどうするかなど話し合いたい」と感想を述べても

らった。児童にとっても、自らの命を自ら守ることや、家族との絆の大切さを認識できる、非常に貴重な機会となったであろう。

学校防災教育の支援体制整備に向けて

プログラムは無事完成し「防災教育プログラム制作事業」は終了を迎えた。しかし、プログラム教材を学校に配布しただけで、速やかに学校現場に防災教育が普及していくとは考えにくい。新潟県教育庁でも防災教育を学習することを努力事項に掲げてはいるものの、どのように授業を展開すべきなのか、児童生徒のどんな力を育成することが目的なのか、地域との連携の方法など、イメージがつきにくい部分が多々あると思われる。とはいえ、新潟県は自然災害が多発する地域であり、昨今の日本全国を見てもいつどんな災害に見舞われるかわからない。児童生徒の命を災害から守るため、防災教育にある程度の時間を割くことも必要になってくる。弊紙第二号で取り上げたプログラム制作事業の実践校における模擬授業や、第三号で紹介した糸魚川市根知小学校（防災教育チャレンジプラン二〇一二年度防災教育大賞受賞）での取組みは、県下の学校防災教育におけるモデル的事例であり、先駆け的存在である。そういった事例を適宜情報発信していき、防災意識の高揚を図りながら、学校でのプログラム実践をサポートしていくことが、今後の私たちの支援の柱となってくる。学校現場の声としては、防災知識や指導技能を習得するための教職員研修や勉強会、また実践事例を発表しあう活動報告会の開催、授業実践に当たっての各種相談や調整等を行う担当コーディネーターの設置が、ニーズとして上がってきている。こういった教育現場からの声を中心に、平成二十六年度以降、支援体制の整備を図っていく予定である。

プログラム制作で関わっていただいた教職員の方々との意見交換会。
こういった場を今後も増やしていきたい。

昨年の新潟県中学校長会研究協議会（妙高大会）では、防災教育について話し合う場を設けさせていただき、自校での今後の取組みについて、校長先生自らご発表いただいた。また新潟市では「学校と地域との連携」をキーワードに、防災教育の質的向上を図る取組みが平成二六年度から開始することが決定しており、当機構がその事業サポートをしていく予定となっている。

配布された教材を元に、総合的な学習の時間などを利用して、それぞれの学校で実践し、また各学校での工夫を加えていきながら、より良い授業を実践していただけることを期待している。学校の中だけにとどまらず、学んだことを家族と話し合い、地域に広げていくことで、子どもたちにとって大切な学びにつながり、家庭や地域でも防災について考える大きなきっかけとなる。

防災教育を受けた子どもたちが成人し、親になり、それを子どもたちに伝え、次世代に継承されていく。知識や恐怖だけを与えるような防災教育であってはならない。自然豊かな新潟県で育ったことを誇りに思い、自然に向き合いながら地域に住まう姿勢を育めるようなプログラム実践を目指して、学校現場と協働し、地域と連携を図りながら、今後も未来を築き上げる支援を担っていきたいと考えている。

（地域防災力センター　関谷　央子）

新潟県防災教育プログラム実践の心得

Ⅰ．防災教育、基本理念！

1. “災害から生き抜く力”を育む
2. 自然の“恵み”と“災い”の二面性をとらえる
3. “姿勢の防災教育”を通じて“主体性”を身につける
4. 一生涯つかえる“災害から生き抜く力”を身につける
5. 20 年かけて、“災害に強い地域文化”をつくる

Ⅱ．防災教育、実践の留意点！

6. 教職員自身の自然と向き合う姿勢が問われる
7. 災害を“自分事”として主体的にとらえる授業を実践する
8. 教育活動全体を通じて、防災教育の目的を達成する。
9. 家庭や地域と連携した防災活動を取り入れる
10. 学校の特性を踏まえて、カリキュラムを自校化する

（「新潟県防災教育プログラム『教職員用ガイド編』」より抜粋）

毛布と物干し竿で作った簡易担架での訓練（長岡市東北中学校）

シリーズ

人と人

「郷土料理を通じて生まれた地域とのつながり」

雨木（あまき）　香奈子（かなこ）

新潟市出身

大学では「食品の化学」を専攻。大学を卒業後は食品メーカーに就職。農業ボランティアなどの活動にもかかわり、現在は小千谷市岩沢地区の地域おこし協力隊として活動中。

駒井（こまい）　浴子（ひろこ）

十日町市出身

JA いわさわ女性部代表を経て、平成 12 年に結成した「岩沢まごころ市」の代表となる。岩沢地区の伝統料理を「岩沢のごっつぉ（ごちそう）」として継承・普及に努めている。

これまで地域おこしに触れたことはなかったんですよ。でも新潟に帰って、食に携わりつつ人を巻き込むことがしたいと思うようになり、地域おこし協力隊の募集が目にとまり応募しました。

着任してから半年は農家レストランを軌道にのせることが目標でした。地元の人はいつも食べなれている料理を表に出したがらず「そっげのばっかだしたって」という意見が多かったんですよ。でも私はよそから来て、ご飯もごっつぉ（ごちそう）も野菜もおいしい、誰が何と言おうとまずは『塩おにぎり』でと、これだけは譲らなかったですね。注文が入るようになって、絶対このご飯だったらよそからこれ目的で来る人がいるっていうくらい自信は持てましたね。

普段は当たり前のことがすごいことだって思えたらなんとなく嬉しいじゃないですか。地域の人になんぎしてもらいましたけど、そういうのを味わってもらえたかなと思います。

岩沢の『人の距離感』はいい意味で思っていた以上でした。私は恵まれたところに来たなと感じながら活動を続けています。

私たちはまごころ市という会で郷土料理を作っていました。農家レストランの運営は他の団体が主体でしたが、女性は若く、男性が多いこともあり調理や郷土料理となるとたち行かなくなるだろうということで、一緒にやることになったんですよ。

雨木さんに会っての印象は若い人だからとてもついていかんねぇだろうと思っていました。塩おにぎりを出すと言ったとき、それはないだろと思いました。でも、おにぎり膳をはじめたら注文が入るんですよ、これが。私たちは作りながらそっげんがん食べるかねと思っていましたけどね、実は。

考えてみるとよそから来た人には白いご飯がおいしいんですね。白いご飯がこれだけ人気があるというか、人を惹きつけるとは思わなかったですね。地元としては気付かされました。

岩沢にはみんなが食べ物を作れる文化があるのに、次の世代にうまく引き継がれていないんですよね。彼女が若い人たちの代表となり、地域の伝統を伝えていってくれたら嬉しいですね。

取材者：おぢや震災ミュージアムそなえ館　細貝　悠斗

「写真の持つ力」

震災アーカイブス・メモリアルセンター　松本　勝男

中越大震災が発生した年の十一月、小千谷市塩谷集落に初めてボランティアが入った。住民はボランティアに接することが初めてであり、ましてや、避難所でボランティアになりすました盗難事件などもあり、警戒心を持っていた。しかし、あるボランティアが倒壊した家屋の中からアルバムを見つけ出し、家主へ「大切なものですよね」と差し出した。このことをきっかけに住民との信頼関係が芽生え、今に至る交流が続いていると聞く。

中越大震災の被災地は「日本の原風景」として全国的に有名な撮影地が多い。早朝は霧が湧きやすく、水がはられた棚田に写しこまれる朝焼け、迫力ある伝統の牛の角突き、昔ながらの里山の風景、人々の暮らしそのものが魅力ある被写体となっている。震災直後は山の地肌が現れ、棚田は崩壊し、見る影もなかったが、今では鮮やかによみがえり、シーズンともなれば全国から大勢の風景写真愛好家が秀景を求め訪れる。

そのひとつ、十日町市松代・松之山地区には有名な撮影ポイントが散在する。道の駅では撮影ガイドマップが配られ、そのポイントには小さな案内看板が設置され、場所によっては駐車場やトイレまで整備されている。住民のみなさんは初対面であろう愛好家の人達と親しく挨拶を交わしている。「良い所ですね!」「きのうはいい朝焼けだったよ、どっから来たの?」住民のみなさんは「おもてなし」の心を持って迎える。

十数年前、ある写真雑誌に絶景ポイントとして紹介され、多くの写真愛好家が押し寄せ、違法駐車やごみ・農地への入り込みなどトラブルが絶えなかった。その後「快く受け入れる」ことを前提に地域住民が話し合い、様々な対応を苦労しながら考えたと聞く。「この風景は先人から預かった地域の大切な宝物、訪れる人たちと一緒になって守っていくことが地元で暮らす住民の使命だ」。今では全国に誇る美しい風景に囲まれて、お互いに気持ちのいい時間を共有しているようだ。

朝霧涌く里山：長岡市山古志と小千谷市塩谷の境界付近

多くの犠牲者を出した東日本大震災の被災地では津波の被害を受けた瓦礫の中から写真やアルバムを探し出し、持ち主へ届ける事業が続けられてきた。しかし、写真の閲覧に来る人が少なくなり、事業予算の関係で来年度以降その事業を終了または縮小するというニュースを耳にした。犠牲となった家族の写真を飾れず、仏壇に話しかけられないと涙を流す老婆の姿は痛ましい。

写真本来の役割は「記録する」「伝える」「表現する」と言われているが、震災を経験した住民からすると、その役割は様々で「癒し」「思い出」そして「つながり」もある。まずは丁寧に、「伝わる写真」を大切に撮り続け、残していきたい。

まだ雪残る棚田のあぜ道に咲く桜：十日町市松代儀明

≪インフォメーション≫

【来館者５万人セレモニーが行われました！】

平成 23 年 10 月の開館以来、きおくみらいは、3 月 8 日（土）に来館者 5 万人を達成しました。記念すべき 5 万人目の来館者は、長岡市にお住まいの高橋さんご一家で、澤田雅浩センター長より、認定証と記念品の防災グッズが贈呈されました。また、先着３００名様に記念品として防災ホイッスルを配布し、来館者の方へ感謝の気持ちと防災意識の向上を呼び掛けました。

【にいがたイナカレッジ 2014 年度インターン生募集中！】

にいがたイナカレッジでは、2014 年度の長期インターン生を募集しています。1 年間の山の暮らしで自分らしいライフスタイルを実現しませんか？

詳細はＨＰをご覧ください。（http://inacollege.jp/）

【防災そなえチャレンジ 2014 GW 開催！】

4 月 26 日（土）～ 5 月 6 日（火）の期間中、そなえ館では「防災そなえチャレンジ 2014 GW」を開催します。テーマは「地震を体験し、命の守り方を知ろう！」。皆さんは場所によって命の守り方が違うことは知っていますか？ GW はそなえ館で家族と友達と楽しく学んでそ・な・えましょ！

≪コラム・視点防災≫

【パッククッキングのすすめ】

ガスコンロとポリ袋のご用意を！

大規模災害が発生すると電気・ガス・水道が途絶える可能性があります。何も用意していなかった場合は各自治体による備蓄やボランティアのご厚意等による炊き出しを待つほかありません。さらに、物資として配布される食料は炭水化物が中心で、ただでさえ食欲のない被災生活を支えるには不安のある内容になるのではないでしょうか。そんな事態を回避するために、是非覚えていただきたいのが「パッククッキング」です。湯をガスコンロで沸かし、その中でポリ袋に入れた米や、食材を温めることによって、平常時と変わらないご飯や副菜、汁物を作る調理法のことで、ライフラインが途絶える非常時に、調理、洗浄に必要な水を節約しながら、温かいものを口にすることができる画期的な方法です。

被災後の体験談として「温かい汁物がありがたかった」という言葉がよく聞かれます。また、一般的に、ライフラインの中ではガスの復旧に一番日数がかかります。避難所では火器の使用が制限されますが、被災後の生活を健康的に生き抜く手段の一つとして、普段からパッククッキングを取り入れてみませんか。

（長岡震災アーカイブセンター　松井　千明）

会員募集中！

当機構では、地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援して下さる会員の方を募集しています。皆様のご入会をお待ちしています。

参加資格：防災活動に関心のある 18 歳以上の方なら、どなたでも参加できます。
会員特典：当機構が主催する研修・講座・イベント等のご案内をいたします。
年会費　：正会員 5,000 円　個人賛助会員 3,000 円　団体賛助会員 100,000 円（一口以上）
※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙 <COSSS report>　第７号　2014 年４月発行
発行人：山口壽道　　編集：関谷央子　日野正基　松井千明　渡辺千明　細貝悠斗
〒 940-0062　新潟県長岡市大手通 2-6 フェニックス大手イースト 2F 長岡震災アーカイブセンタ - きおくみらい内
TEL：0258-39-5525　FAX:0258-39-5526
E-mail:info@c-bosai-anzen-kikou.jp　http://c-bosai-anzen-kikou.jp/

FREE

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター きおくみらい

【住所】
〒 940-0062
新潟県長岡市大手通 2-6
フェニックス大手イースト 2 階
【開館時間】〔入館無料〕
平日　　10:00 ～ 18:00
土日祝　10:00 ～ 17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【E-mail】
kiokumirai@cosss.jp

おぢや震災ミュージアム そなえ館

【住所】
〒 947-0026
新潟県小千谷市上ノ山 4-4-2
小千谷市民学習センター「楽集館」2 階
【開館時間】〔入館無料〕
9:00 ～ 17:00
【休館日】
毎週水曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-7480
【FAX】
0258-89-7485
【E-mail】
sonae@cosss.jp

川口きずな館

【住所】
〒 949-7503
新潟県長岡市川口中山 1441
川口運動公園内
【開館時間】〔入館無料〕
10:00 ～ 17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-3620
【FAX】
0258-89-3621
【E-mail】
kawaguchi-info@cosss.jp

やまこし復興交流館 おらたる

【住所】
〒 940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢甲 2835
やまこし復興交流館（旧山古志会館）
【開館時間】〔入館無料〕
9:00 ～ 17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-41-1203
【FAX】
0258-41-1204
【E-mail】
orataru@cosss.jp